重要文化財朝日遺跡出土品（貝殻山貝塚）

本企画展では、重要文化財に指定された朝日遺跡の出土品から、貝殻山貝塚の発掘調査（1971年）と史跡隣接地の発掘調査（1995・96年度）で出土した弥生時代前期の資料も展示しています。

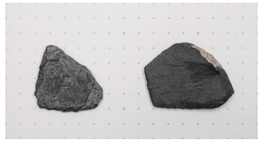
12-1 ◎遠賀川系土器（弥生前期／本館蔵）

12-2 ◎条痕文系土器（弥生前期／本館蔵）

12-3 ◎粗製剥片石器（弥生前期／本館蔵）

12-5 ◎角未成品（弥生前期／本館蔵）

12-6 ◎牙製垂飾（弥生前期／本館蔵）



12-7 ◎スクレイパー（弥生前期／本館蔵）

12-4 ◎骨角製品（弥生前期／本館蔵）左:やす、右上:鏃、右下:弭（ゆはず）

史跡貝殻山貝塚交流館

ミュージアムの別館であり、史跡貝殻山貝塚のガイダンス施設となっています。ガイダンス室には、史跡指定の契機となった発掘調査の出土品や出土した人骨、貝層の剥ぎ取り等の資料を展示しています。企画展と合わせてぜひご覧ください。

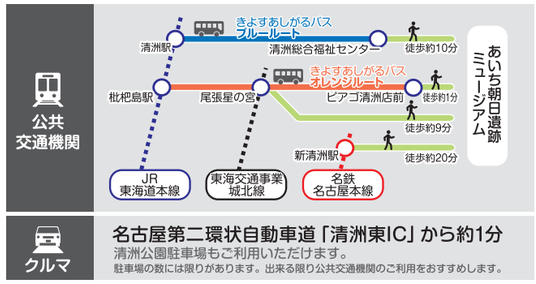
12-8 史跡貝殻山貝塚交流館

あいち朝日遺跡ミュージアム

■ 愛知県清須市朝日貝塚1番地　■ TEL：052-409-1467　■ 駐車場 15 台

企画展
「貝殻山貝塚 - 史跡指定50年 - 」
編集・発行
あいち朝日遺跡ミュージアム
2022（令和4）年1月22日

AICHI ASAHI SITE MUSEUM
あいち朝日遺跡ミュージアム



～あいち朝日遺跡ミュージアム企画展～

貝殻山貝塚
－史跡指定50年－

AICHI ASAHI SITE MUSEUM
あいち朝日遺跡ミュージアム

はじめに

貝殻山貝塚（清須市）は朝日遺跡で最初に発掘調査が行われた弥生時代の貝塚です。この周辺は、弥生時代前期に、朝日集落で最も早く人々が暮らし始めた場所でもあります。

朝日遺跡のスタート地点ともいえる貝殻山貝塚は、昭和46（1971）年に国の史跡に指定され、昨年で50年を迎えました。

本企画展では、史跡指定以前の発掘調査による貴重な出土品を取り上げるとともに、近年の調査研究で明らかになった貝殻山貝塚周辺の最新の成果を紹介することで、あらためて貝殻山貝塚の研究史上の位置付けとその重要性を捉え直していきます。

目次

はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

貝殻山貝塚調査のあゆみ ・・・・・・・・・・・・・ 4

貝殻山貝塚の出土品

　愛知教育大学･名古屋大学博物館所蔵資料 ・ 6

史跡指定50周年

　『50年前の調査と関わった人々』 ・・・・・ 10

重要文化財朝日遺跡出土品（貝殻山貝塚） ・・ 12

史跡貝殻山貝塚交流館 ・・・・・・・・・・・・・ 12

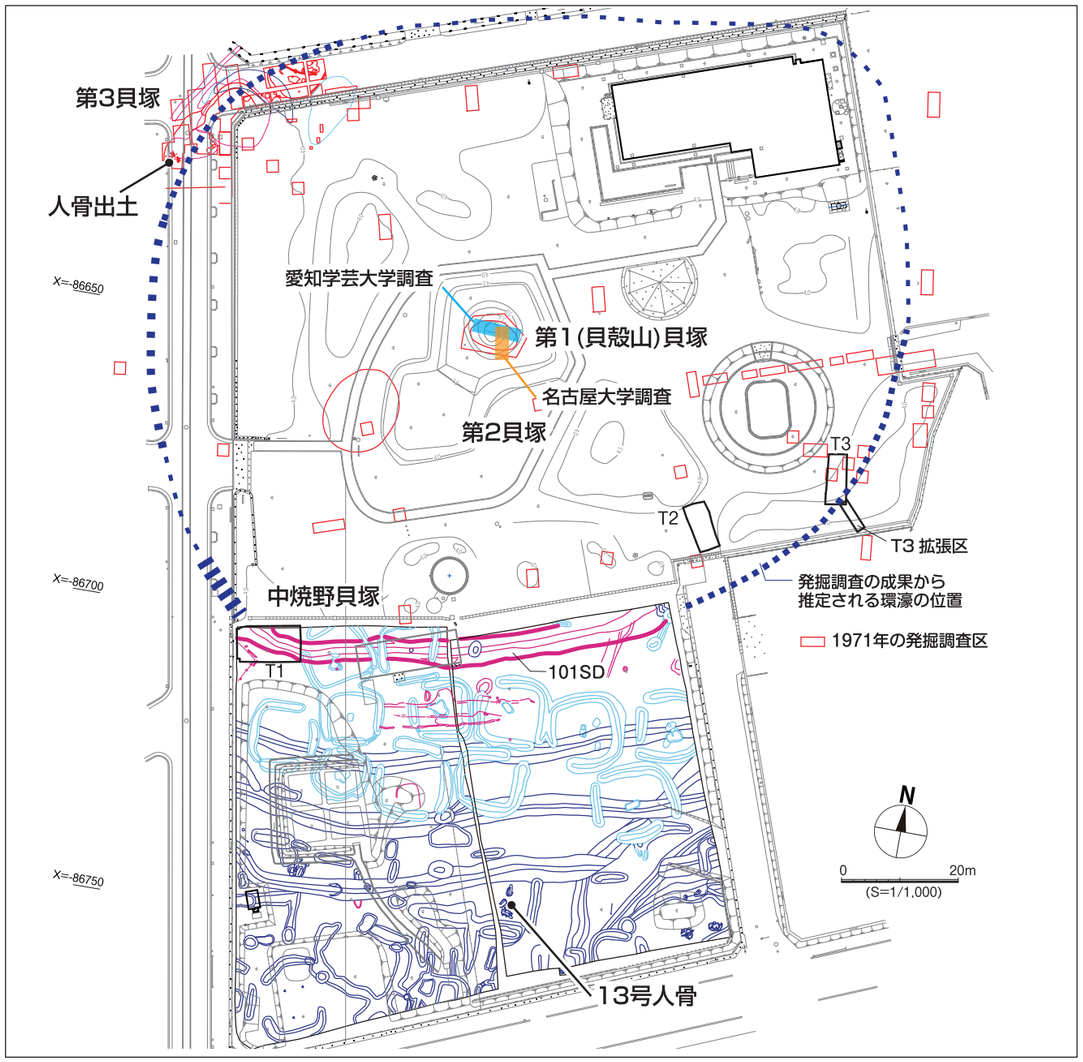
2-1 整備前の貝殻山貝塚（柴垣勇夫提供）
貝殻山墳丘の裾は貝層が露出していた。

凡例

・本書は2022年1月22日から3月13日まで、あいち朝日遺跡ミュージアムで開催する企画展「貝殻山貝塚－史跡指定50年－」の展示パンフレットである。
・本書の構成と実際の展示構成とは異なる部分がある。
・本書の時期区分は、弥生時代前期（BC.8～BC.4c）、中期（BC.4～BC.1c）、後期（AD.1～2c）、終末期（AD.2～3c）とするが、各地域の並行関係は厳密なものではない。
・掲載資料のうち重要文化財には「◎」を付している。
・掲載写真･図等の内、とくに記載のないものは、本ミュージアム所蔵である。
・本書の執筆･編集は、原田幹が行った。なお、10-11頁「史跡指定50周年『50年前の調査と関わった人々』は、柴垣勇夫氏から玉稿を賜った。
・本展覧会の開催にあたり、下記の機関･個人から協力を得た。
　愛知教育大学附属図書館、名古屋大学博物館、加藤昌、門脇誠二、柴垣勇夫、須賀永帰、玉井隆光、西宮秀紀、廣瀬允人、渡邉英幸

参考文献

愛知教育大学 1989『増補井ヶ谷古窯址群－愛知教育大学所蔵考古資料調査報告－』
愛知県 2021『史跡貝殻山貝塚整備報告書』
愛知県教育委員会 1972『貝殻山貝塚調査報告』
大参義一 1958「愛知県西春日井郡貝殻山貝塚」『日本考古学年報7（昭和29年度）』
篠田謙一ほか 2021「愛知県清須市朝日遺跡出土弥生人骨のミトコンドリア DNA 分析」『国立歴史民俗博物館研究報告』第228集
藤尾慎一郎ほか 2021「愛知県清須市朝日遺跡出土弥生人骨の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第228集



3-1 貝殻山貝塚周辺の遺構

3-2 朝日遺跡全体図

貝殻山貝塚調査のあゆみ

貝殻山貝塚は、昭和4（1929）年に加藤務により発掘調査が行われ、翌年『愛知県の新石器時代』で紹介されたことで、弥生時代の貝塚として知られるようになりました。昭和20年代には、個人、大学による学術調査がさかんに行われました（6〜9頁に愛知学芸大学、名古屋大学の調査資料を掲載）。これらの調査によって、貝殻山貝塚の最下層の土器群は、東海地方の弥生土器として最も古い様相をもつことが明らかになり、貝殻山貝塚は尾張地方最古の弥生遺跡として、また、西日本を中心とする前期弥生文化東限の遺跡として、学界で注目されるようになったのです。愛知県は、昭和43（1968）年に貝殻山貝塚及び検見塚（けみづか）の二つの貝塚を県史跡に指定しました。

昭和40年代になると、貝殻山貝塚周辺で土地改良事業が計画されました。愛知県教育委員会と清洲町（現清須市）は、協議のうえ畑地削平によって遺跡の破壊が想定される部分の工事を中断し、試掘調査を実施したうえで、その結果により道路の計画変更を行うことになりました。発掘調査は昭和46（1971）年3〜6月にかけて、第1次（190㎡）と第2次（300㎡）に分けて実施されました。弥生時代前期から中期初頭の良好な貝層と弥生時代前期の豊富な遺物が出土し、調査後半には、愛知県内では初めてとなる弥生時代の埋葬人骨2体が出土しました。発掘調査の成果を受け、昭和46（1971）年12月15日、貝殻山貝塚周辺の10,169.4㎡が国史跡に指定されました。史跡指定地は公有地化され、昭和50（1975）年4月には、史跡地内に愛知県清洲貝殻山貝塚資料館が開館し、弥生時代中期の復元住居等も整備されました。

昭和50年代からは、環状2号線建設に伴う発掘調査が進展し、東海地方を代表する弥生時代集落「朝日遺跡」として広く知られるようになり、貝殻山貝塚も朝日遺跡を構成する集落の一部であるという認識が定着していきました。道路建設等に起因する発掘調査は膨大な出土資料をもたらし、平成24（2012）年には貝殻山貝塚の発掘調査資料を含む朝日遺跡の主要な出土品2,028点が重要文化財に指定されました。

その後、平成7・8（1995・1996）年度の発掘調査では、史跡指定地南側で弥生時代前期の環濠がみつかっています。この環濠は、史跡再整備に伴う平成29（2017）年度の発掘調査でもその続きが確認され、現在は一部の遺構復元、平面表示、貝層の復元表示などの整備が行われています。

また、近年過去の出土資料の調査から新たな事実も明らかになっています。弥生時代前期の土器に残された種子の圧痕を調査したところ、複数のイネの圧痕が見つかり、この時期から本格的な農耕社会に入っていたことがあらためて確認されました。

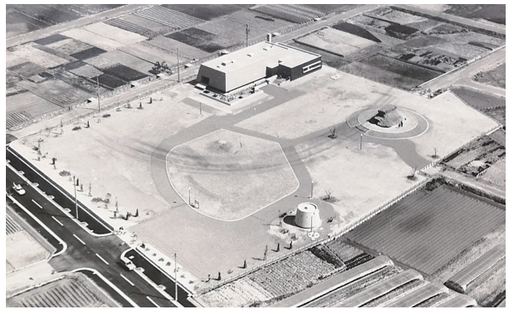
また、現在ミュージアムが建っている場所で出土した人骨の年代測定、DNAの分析を進めています。このうち一体の人骨は、紀元前8世紀前半から前6世紀前半、弥生時代前期に埋葬されたことがわかりました。また、遺伝子の特徴から渡来人の可能性が高いとも指摘されています。

貝殻山貝塚は、学史上の重要性はもちろんのこと、今後の科学的な分析・調査によっても、さらに新しい知見をもたらす可能性が高い重要な遺跡といえます。

4-1 『愛知県の石器時代』

4-2 貝殻山貝塚と著者（4-1から）

4-3 1971年の発掘調査風景


5-1 整備当初の史跡（撮影中日新聞社）

5-2 復元された弥生時代前期の環濠

5-3 イネの圧痕と電子顕微鏡写真（中山誠二提供）

レプリカ法による栽培植物の調査

製作時に取り込まれた種子や昆虫が、圧痕として土器表面に残っていることがあります。この圧痕をシリコーン樹脂で型取りし、電子顕微鏡で種類を同定します。

東海地方では、縄文時代晩期後半からアワ、キビなどの雑穀が現れ、弥生時代前期になるとイネが普及してくることがわかってきました。

弥生時代前期の人骨

平成8（1996）年度に出土した13号人骨は、短径87cmの埋葬土坑に、頭を北東に向け、仰臥屈位（ぎょうがくつい）で埋葬されていました。20代前半の男性で、身長は160cmぐらいと推定されます。下顎の左大臼歯、右大臼歯が歯周病により生前に脱落していました。

年代測定の結果は、2528±2114CBP（較正年代は紀元前8世紀前半から前6世紀前半）でした。この地に移り住んだ初期の弥生人だったとみられます。

5-4 13号人骨出土状況（愛知県埋蔵文化財センター提供）

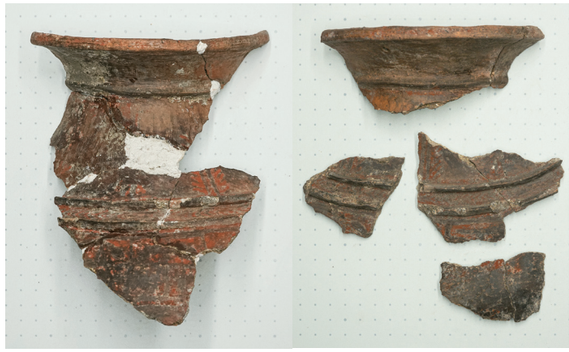
貝殻山貝塚の出土品　愛知教育大学・名古屋大学博物館所蔵資料

6-1 壺(弥生前期／愛知教育大学蔵)

6-2 壺(弥生前期／名古屋大学博物館蔵)

6-3 壺(弥生前期／名古屋大学博物館蔵)

6-4 壺(弥生前期／愛知教育大学蔵)


6-5 壺(弥生前期／名古屋大学博物館蔵)

6-6 壺(弥生前期／名古屋大学博物館蔵)

6-7·8 壺(弥生前期／愛知教育大学蔵)

6-9 壺(弥生前期／名古屋大学博物館蔵)

6-10 壺(弥生前期／名古屋大学博物館蔵)

7-1 甕(弥生前期／名古屋大学博物館蔵)

7-2 甕(弥生前期／名古屋大学博物館蔵)

7-3 甕(弥生前期／名古屋大学博物館蔵)

7-5 甕(弥生前期／愛知教育大学蔵)

7-4 甕(弥生前期／名古屋大学博物館蔵)

7-6 甕(弥生前期／愛知教育大学蔵)

7-7 鉢(弥生前期／名古屋大学博物館蔵)

7-8 鉢(弥生前期／名古屋大学博物館蔵)

愛知教育大学所蔵資料

昭和25（1950）年、愛知学芸大学（現愛知教育大学）名古屋分校史学教室が、貝殻山貝塚に、東西方向の長さ8m、幅2mのトレンチを設定し発掘調査を実施しました。層序は12層からなり、貝層は表土下に約1.8m堆積していたそうです。出土遺物は、弥生時代前期の遠賀川（おんががわ）式土器を主としており、石器、骨角器、シカ、イノシシなどの獣骨もあります。貝類は、ハマグリ、カキ、シジミがそれぞれ貝層を構成し、サルボウ、ハイガイ、アカニシ、ヘナタリ等も含まれていました。これらの出土品は愛知教育大学附属図書館に保管され、一部の資料は教育史料室において展示されています。

8-1 蓋(弥生前期／愛知教育大学蔵)

8-2 蓋(弥生前期／名古屋大学博物館蔵)

8-3 甕(弥生前期／名古屋大学博物館蔵)

8-4 甕･壺(弥生前期／名古屋大学博物館蔵)

名古屋大学博物館所蔵資料

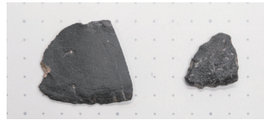
昭和29（1954）年8月、「尾張平野最古の遠賀川系文化遺跡としての位置を確かめる」ことを目的として、名古屋大学考古学研究室が発掘調査を行いました。トレンチは愛知学芸大学の調査区と一部重なるように南北に設定されたようです。出土した土器は、層位的な調査に基づき、貝殻山下層式・同中層式・同上層式と分けられました。下層式とされた土器の特徴は、遠賀川系土器を主とし、それまで知られていた名古屋市西志賀（にしかが）遺跡よりも古い様相であることがわかりました。これらの資料は、現在は名古屋大学博物館において保管されています。

石器・骨角器

9-1 骨角器(弥生／名古屋大学博物館蔵)

9-2･3 骨角器(弥生／愛知教育大学蔵)

9-4 石器(弥生／愛知教育大学蔵)
上：粗製剥片石器、下：石鏃


9-5 石器(弥生／名古屋大学博物館蔵)
スクレイパー

獣骨等

9-6 シカ(弥生／名古屋大学博物館蔵)

9-8 鳥類(弥生／名古屋大学博物館蔵)

9-9 魚類(弥生／名古屋大学博物館蔵)

9-7 イノシシ(弥生／名古屋大学博物館蔵)

9-10 貝類(弥生／愛知教育大学蔵)

史跡指定50周年
『50年前の調査と関わった人々』

元愛知淑徳大学教授　柴垣勇夫

1. 昭和43年～45年のできごとと遺跡保存の葛藤

昭和43（1968）年は私が愛知県教育委員会社会教育課文化係へ配属された翌年で、国では文化庁が発足した。飛鳥・藤原宮保存運動も急展開した時でもある。当時文化係は総勢5名で、文化財と文化両方の行政的な業務を扱っていて、文化財のうち史跡名勝天然記念物、埋蔵文化財を扱うのは、私と係長の2名、他は、それ以外の文化財を担当するものが1名、文化行事の後援などを扱う係1名、社会教育全般の広報を担当するもの1名という配置で、係長はすべてを管轄した。遺跡担当は私一人で東奔西走の毎日。当時『愛知県遺跡分布図』（昭和47年3月刊）を全県下に亘って 教員や民間の考古学研究者の方々を動員して作成していた。更に県営圃場整備事業に掛かる遺跡の発掘調査の調整、名勝指定地の現状変更問題、遺跡調査への学生による行政発掘反対運動など問題が山積み状況だった。名古屋市守山区の白鳥塚古墳前方部の民間会社の買収事件は、文化庁から横山浩一調査官（その後、奈良国立文化財研究所（以下奈文研）埋蔵文化財センター長から九州大学教授）の指導を受け、仮指定という愛知県では前例のない行政行為を行いその後の市による土地買収へと進めた。直前には県指定史跡刈谷市本刈谷貝塚の一部が市道で削平されるため発掘調査の調整を市側とやりあったりした。この昭和43（1968）年、朝日貝塚（貝殻山、検見塚）が県指定史跡となった。直後に環状2号線が計画され、昭和44（1969）年12月から翌45（1970）年1月にかけて吉田富夫氏（翌46年11月に急逝、享年59才）を調査主任にその広がりを探る試掘調査を行い、建設省国道事務所、県土木部道路建設課と協議が始まった。そこへ突然、朝日地区の土地改良事業が農閑期を期して工事を行うという計画が浮上し、急遽清洲町側及び朝日土地改良組合とけんか腰の折衝となったのだった。

2. 貝殻山貝塚周辺の土地改良事業とその調整への奔走

昭和45（1970）年1～2月にかけ朝日土地改良組合、清洲町との折衝は、町側が一部を公園にする案を示し、保存地域をどう決めるか、土地買収はどこが行うか、そのための調査範囲と誰がどう調査するのか等協議を重ねる中で、改良事業が時間が待てないと工事を一部進める事態となり、工事差し止めの行為を町側に要請した。一方で、「朝日遺跡保存会」が声明を発し、県、文化庁への保存要望書を提出する事態となった。調査を誰に依頼するかで、当時県文化財保護審議会委員であった名古屋大学澄田正一、南山大学人類学教室小林知生の両先生に打診をするも、学生の反対運動から了承を得られず、当時教員を中心に発掘調査を進める体制であった行政組織を改編して直接行政組織が発掘調査体制をとる必要に迫られることとなった。

まず澄田正一先生の指導を得ながら一宮市史編さん室の岩野見司、名古屋市在住の末岡熙章、井上光夫氏ら週末に時間を割いて協力できる人々を調査員にする体制をとり、来る4月以降の県にできる文化財課での専任調査員確保までの第1次の調査を実施した。そして名古屋大学の楢崎彰一先生の助言で当時文化庁鑑査官であった坪井清足氏に依頼し文化庁補助金支出の確約を得て、第2次の発掘調査へと進めた。

3月末には、調査で出土した遠賀川系土器、骨鏃、石斧、石鏃など弥生前期を物語る遺物をCBCTVスタジオに持ち込み、保存会との対談という形でニュース番組で放映。弥生時代の始まりを証明する遺物群、稠密な貝塚の分布、一方で保存範囲を土地所有者と改良事業との調整から限定せざるを得ないことを説き、その後桑原幹根県知事までこの問題を上げ、保存活用を前提に土地買い上げを県が行うという意思表示も得た。こうして第2次の保存範囲を確定する調査に入った。この昭和46（1971）年4月、やっと県教育委員会に文化財課が発足し、伊藤稔という同僚を得て二馬力となったのだった。調査は、農閑期の5月までに実施しなければならない時間的制約のもと、伊藤稔、嘱託の榊原芳久、私の3人で地域の農家の主婦を雇用し発掘調査となった。またこの土地改良事業では、用水路の確保が雨期までに完了しないと農家の死活問題に発展するため、調査期間との調整のもと、第3貝塚の部分を主体的に進めることとなった。5月下旬には、田中琢文化庁調査官（のち奈文研所長）が来県し澄田正一先生と保存範囲を検討し、第1貝塚（貝殻山貝塚と呼ぶ小山）を中心とした13,000㎡とすることでまとまり、この年の12月に国の史跡指定へと進んだ。保存運動側からは没学問的、没大衆的、没意識的な間に合わせの調査だ（『考古学研究』69号昭和46年6月）と非難されながらの調査であった。当時清洲町役場は、新庁舎へ移転していたため旧清洲町庁舎が空いていた。その宿直室を調査員宿舎とし、春まだ寒い時期を連日調査に没頭した。5月末に至り、最終的な買上げ部分が確定した矢先に大発見が第3貝塚の一部であった。弥生時代の人骨が愛知県で初めて見つかったというニュースで地元の現地説明会に多くの人々が駆け付けた。愛宕地区真福寺の住職に依頼し、読経のもと霊を安らげた上で保存作業を雨天の中、6月22日まで続けた。2体の人骨は、石膏で周囲を固め、ラワン材で枠を作り10ｔクレーン車で吊り上げ旧清洲町庁舎へ搬入した。

10-1 1951年国営吉胡貝塚調査の坪井清足先生と名古屋大学澄田正一・楢崎彰一先生方（筆者提供）

3. 国指定史跡への文化庁、奈文研職員の応援、貝殻山貝塚資料館の建設とその後

国指定の手続きを進める中で面積は改良組合での積算から10,169.3㎡となったが、活用のための展示館の建設も文化庁で了解された。その後の朝日遺跡の調査は、環状２号線の建設計画が早まり引続き実施されることとなり、昭和47（1972）年度から途中中断されながらも県直営で、やがて県埋蔵文化財センターへ引継がれ延々18年余に及ぶこととなった。この調査で朝日遺跡が弥生時代全期にわたる集落であることが明らかになり、膨大な資料が蓄積された。奈文研の研究者も東海地方の代表的な資料として活用した。展示館も昭和50（1975）年4月に開館したが、その後名古屋市に見晴台考古資料館ができ、両者が弥生時代展示館として多くの見学者を呼ぶ施設となった。展示館は「愛知県清洲貝殻山貝塚資料館」と名付けられ愛知県の予算で、清洲町がその運営に携わることになり、町職員として採用された学芸員がこの展示館を運営した。長谷部学、丹羽博、高橋信明、野口哲也氏ら歴代の学芸員が展示事業等に関わった。

11-1 1971年の人骨取上げの作業、右 伊藤稔、左 榊原芳久（筆者提供）

資料館では、定期的な企画展示も計画され「愛知の銅鐸」展、「青銅鏡」展、「朝日遺跡Ⅰ～Ⅲ」展などが開催された。平成6年（1994）には、新資料館の建設計画も坪井清足・楢崎彰一・伊藤秋男氏らの検討委員会で行われ、史跡指定地南の5,500㎡がその対象地として選択された。新資料館を具体化するため当該地の発掘調査も平成7, 8（1995,1996）年度に実施され弥生時代前期の包含層が一部に確認されたものの、主要な前期集落の環濠は北寄りにあることが判明し、新施設の計画は具体化し新聞発表までされた。しかしバブル景気の崩壊から県財政が圧迫され、計画は凍結されてしまった。やっと平成29（2017）年度に規模縮小ながら再び新施設建設が具体化し、今回「あいち朝日遺跡ミュージアム」の開館となった。ミュージアム建設に並行して、史跡の再整備も進められ、復元住居や高床倉庫、貝層表示も加わった。本館では新しい機器導入の展示や体験学習室もでき、活発な博物館活動が展開されだした。

4. 新ミュージアムへの期待

一昨年秋に開館した新ミュージアムは、今順調に事業が展開されている。これからの展示や体験学習への期待も大きいが、周辺の朝日遺跡で発見された銅鐸出土地や大規模方形周溝墓、環濠のなかの逆茂木、乱杭など集落の重要な地点を見学し、弥生時代当時の集落を彷彿とさせる方策や散歩道の整備など、見学者の周辺への意識を高める事業展開をぜひ望みたい。